誰にも、一瞬の燃え上がる瞬間が

この夏、右脚と左手首にけがをした。動きがとれず、ただテーブルの前に座り込んで、本を読むしか時間の過ごしようがなかった。しかもけがの治癒は歳を越しそうだ。読むといっても難しい本は無理である。家人が持ち出したのは、中央公論社版の松本清張短編集1である。その冒頭にあるのが「張込み」。後妻に入った平凡な主婦が、昔の恋人との間で一瞬の恋の炎を燃え上がらせる話である。

左手首を
骨折しました
（右足も）

東京・目黒の重役宅に強盗が入り、重役を殺し、金品を奪った。犯人として捕まった山田某は、共犯がいるといい、石井久一の名を挙げた。石井は山口県の出身で、上京して同じ土工をしていたが、最近は胸を病み、自殺をほのめかしていた、という。

特に捜査本部を騒がせたのは、30歳になる石井が昔の女の夢をよく見る、と山田に言っていたことだ。結婚して九州にいる、その住所も分かっていると。捜査本部が石井の原籍地に問い合わせたところ、全てが判明した。女性は確かに石井と恋仲だったが、石井が上京して1年ばかりのち九州のほうに縁付いたと言う。

捜査本部は意見が割れた。石井が女を忘れられずに女の家に立ち回るのではないか、いや3年前に別れた女にそんなに未練があるだろうか。柚木刑事は「石井はどこかで自殺するかもしれない。その前に昔の女に必ず会いにくる」と主張、この少数意見は課長の承認するところとなり、東京から九州のS市まで出張を認められた。

映画のポスター

石井の恋人だったさだ子(28歳)が後妻として嫁いだのは横川氏(48歳)。中学を頭に3人の子持ち。相互銀行員。さだ子とこども達との仲は悪くないようだ。横川家が丸見えの宿をとった柚木刑事の目からみると、平々凡々たる毎日である。主人は夕方6時に帰宅する。さだ子は子供達を送りだすと、布団干し、洗濯のあと編み物を始める。夕方、買い物に出掛ける。手には5升ビンを抱えている。主人は晩酌をやるようだ。

3日目、4日目張込みに変化はない。5日目である。郵便配達夫が簡易保険の集金に回っている。その後、洋服姿の外交員が各家を回り、さだ子の家にも入って行ったが、直ぐにでてきた。20分あと、さだ子が姿をみせた。スカートの色が変わっている。10時50分。買い物にでる時間ではない。柚木刑事は旅館をとびだした。宿賃は前払いだ。

柚木刑事は、駅前のバス停で割ぽう着の女と洋服の男が「白崎」行のバスに乗った事を知った。柚木刑事はタクシーで終点の白崎に行ったが、二人は5つ手前の停留所でおりたことをつきとめた。刑事は応援の電報を警察に打つ一方、引き返し、言われた通り、温泉場に向かう山道を歩きはじめた。

映画の高峰秀子
と田村高広

途中、銃声を聞いた。石井が女を撃ったのか。だが2発目は聞こえなかった。犬をつれた猟師に出会い、問題の2人の行方を確かめた。やがて用水路に出た。二人が堤防に座っていた。折から秋。紅葉の主役の櫨（はぜ）の林が赤い影を投げている。

男の膝のうえに女は身を投げていた。男は女のうえに何度も顔をかぶせた。女の笑う声が聞こえた。女が男の首を両手で抱え込んだ。さだ子に火がついた。あの疲れたような、情熱を感じさせなかった女が燃えている。

2人は川北温泉のある旅館に入った。柚木刑事は、湯上がりで廊下を戻ってきた石井を誰何し、手錠をはめ、逮捕状を見せ、警察に引き渡した。そして部屋で待っていた。さだ子が襖を開けた。柚木を見て部屋を間違えた表情をした。「奥さん」柚木は言った。「石井君は事情があって警察に行ってもらいました。奥さん、すぐにバスでお帰りなさい。ご主人の帰宅に十分間に合いますよ」。

さだ子の恋のはむらはあっという間に消えてしまった。だれにでも、平々凡々たる人生にも魂の燃える一瞬はある。その種類は色々だろうけれども。そうでなければ長い人生やりきれたものではない、と思う。さだ子の場合、不倫とかとは別の問題である。ただ彼女はこれを糧に生きてゆけるのではないか。全編、清張のヒューマニズムがあふれている。犯人石井も刑が軽く済み、病気も直って正々堂々の人生を歩んで欲しい、と思う。映画は田村高広、高峰秀子で見たことがあるが忘れてしまった。もう一度見たい。確か2人とも俳優として全盛期だったはずである。　（小林）